

コープいしかわ 炊き出しバスボランティア

コープいしかわのバスボランティアは7回目を迎え、11月19・20日にかけて、19人の組合員・役職員が、陸前高田市高田高校広田分校と同広田小学校にある2つの仮設住宅で炊き出しなどの活動をしました。

18日の夜、金沢大学の学生40人あまりとバス2台で出発したコープいしかわのボランティア参加者たち。19日は、岩手あい鴨鍋の炊き出しをメインに行ないました。学生たちは、10人に足湯、30人が近くで行なわれていたいわて生協の花壇作りに合流して、活動を行ないました。20日には、広田小学校の仮設住宅に、チラシなどの案内を貼る用の掲示板を設置しました。

コープいしかわでは、東日本大震災が起きた直後にボランティアバスの検討を始めました。しかし、何から始めて良いか分からず、支援を模索していたとき、金沢大学の学生による足湯ボランティアサークル「灯(あかり)」が広田町に行っていることを知り、金沢大学を訪ねたと、総合企画部の高島 寛(たかばたけ・ゆたか)さんは言います。

「ボランティアセンターを通じた支援だと、ガレキの撤去などが主になります。当初はそれらに取り組んだのですが、被災された方と直接触れ合い、少しでも元気になってもらえる支援こそがわたしたちの強みをいかせるのではないかと考えるようになりました」。被災された方に、足湯を楽しんでいただきながら、手足のマッサージをすることで交流ができるノウハウを学ぶために、足湯サークルの学生にもボランティアバスに同行してもらうことになったと高島さんは言います。コープいしかわの参加者は、足湯を手伝いながら、被災された方から被災当時のつらかったことを聞いたり、お互いの身の上話などをする中で、被災された方に寄り添い、交流できるようになったそうです。

これにプラスして、炊き出しとバスフィズ(入浴剤)作りを一緒に行ないました。

炊き出しでは、今回は「岩手あい鴨鍋」とおにぎりを仮設住宅の皆さんに提供しました。コープいしかわでは岩手県で飼育された合鴨を使った「岩手あい鴨鍋セット」を共同購入で取り扱っていました。しかし、陸前高田市と大船渡市にある製造会



足湯とマッサージしながら、お話をする。



鴨鍋は、その場で調理して、提供された。

社(株)アマタケの工場が被災。その後7月に操業を再開した(株)アマタケを支援する意味を込めて、炊き出しで提供することにしました。

バスフィズ作りは、これから寒い季節に向かうことから、何か暖かくなってもらえる支援法はないかと考えていたときに思いついたもので、こうした場を設けることで自宅に引きこもりがちにならないようにもしたかったと高畠さんは言います。重曹やアロマオイルなどの材料を持ってきて、被災者の方々に作り方を教えながら一緒に作りました。このバスフィズを隣でやっている足湯に使うと良い香りがして大変喜ばれ、思わぬ効果もありました。

また今回、石川県内の協力団体から託された冬物衣料(古着)もダンボールにして30箱分持参し、仮設住宅の居住者に提供しました。これは、前回訪問した際、居住者からの要望を受けてのもので、大変喜ばれました。

ボランティアバスに参加した組合員の渡辺ひろみ(わたなべ・ひろみ)さんは、「陸前高田市に来たのは初めてです。ガレキの片付けは無理でも、炊き出しなら私でもできます。以前、流しそうめんの炊き出しをした友人が、被災された方に大変喜んでいただき力をもたらたと話していました。私も被災者の方々の話を聞きたいと思い参加しました。炊き出しのあい鴨は岩手県産なのに皆さん鴨鍋を食べたことがないそうです。珍しいだけでなくとてもおいしいと喜んでくださるのを肌で感じることができました。また、活動を通じて被災された方々とお話をするのができたので、参加してよかったです」と話していました。

同じく事務局として参加した谷口 智一(たにぐち・ともいち)さんは、6回目の参加になるといいます。何度も仮設住宅におじゃましているので顔なじみの方もできて、次第にみなさんが元気になっていく姿を見るとうれしいといえます。「わたしたちが再び訪れたことを大変喜んでくれて、『編み物をする趣味がみつかったのよ』などと話をしてくれるようになりとても安心しました。足湯をしながら世間話をするのですが、それを皆さんはとても喜んでくださるようで、足湯を待っていてくださる方がたくさんいることが私の心の支えになっています」と谷口さんは言います。

高田高校広田分校仮設住宅(129世帯、約350名)の自治会副会長をしている戸羽忠夫(とば・ただお)さんによると、「ボランティア活動にいらっしゃる方々には、できるだけ集会所をオープンにして、自治会もできるだけ協力することにしています」と話していました。特に、仮設に住んでいると引きこもりがちになるので、ボランティアの方々に足繁く集会所に通ってもらい、居住者の話を聞いてもらうことをお願いしているそうです。また居住者にも、これに応えるよう伝えているといえます。被災した方たちは、本当に震災当時のことや苦勞を話したいと望んでおり、話すことで少しは気分が楽になるようです。

「震災発生から8ヶ月も過ぎると、仮設にいらっしゃるボランティアも一時よりは少なくなっていると聞いていますが、こうして多くの方が来てくれるのは大変ありがたいです。私どもも皆さんが来やすい、そして、住民が行きやすい場所になるように配慮をしています。今日は大変盛りだくさんの支援をいただき、みんな喜んでいました」とおっしゃっていました。